

古文書を読む会学習記録

作成日 平成28年1月30日

開催日	平成28年1月28日	時 間	10:00～12:00
場 所	金沢公会堂	出席人数	15名
講 師	真田 雅行氏	作成者	大門 利晴
テーマ	第二学習 奥の細道		
概要	<p>思った以上になかなか難しい。文章は変体仮名を多く使い、日本古典だけでなく中国古典の表現が散りばめられ、芭蕉の文学的な装飾もある。</p> <p>予習が必要と思った。それでも一番読み易い文体のテキストとのこと。</p> <ul style="list-style-type: none">・過ぎ行く月日・時は百代にわたる永遠の旅人のように悠久だが、旅をすみかとする人は、古くから多くが旅の途上で死んでいるようにはかない。が、何時からか自分も先人のように気ままに白河の関を超えて漂泊の旅をしたいとの思いに駆られて、住まいを人に譲り旅に出ることにした。 <p>○草の戸に 住みかはる世ぞ ひなの家 と、この発句を庵の柱にかけた。(この草庵も住む人が替わり、雛人形を飾ってさぞ賑やかになることであろう。)</p> <p>弥生(3月)の27日、名所上野・谷中の桜に別れを告げ、親しい人達が宵から見送りに集まってくれて、千住まで船に乗りそこで陸にあがり、姿が見えなくなるまで見送ってくれた。なごりおしくて足どりは重い。</p> <p>○行く春や 鳥啼き魚の 目は泪 と、この句を旅の始めとして出立した。(過ぎ行く春を惜しんで鳥は泣き、魚の目には涙が浮かぶ。別れも悲しいものだ)</p> <ul style="list-style-type: none">・今年が元禄2年であろうか。ふと思い立ち奥州の旅路に出たが、未だ目にしていないところに行って生きて帰れたら、とささやかな希望をもって草加の宿に着いた(実際の宿泊は春日部)。身一つでと思って出たが、衣類、筆記用具、餞別の類が肩に重くかかり、道すがらの煩いとなろうが仕方がない。・煙に因んだ歌枕の「室の八島」(大神神社)に参詣して、4月1日、日光山に参詣。ここは昔二荒山といったが空海(誤伝。実は同時代の勝道上人)が開基の際、日光と改めた。今その威光は天下に輝きその恩恵は行き渡り、人々は安堵している。 <p>○あらたふと 青葉若葉の 日の光 (あゝ尊いことよ、日光では日の光に青葉若葉が輝いている)</p> <p>○剃り捨てて 黒髪山に 衣更え 曾良 (黒髪を剃って出立し、黒髪山に来て頭の更衣えの時期を迎えた)。</p> <p>黒髪山とは男体山のこと。曾良は元武士で、名を惣五郎といった。私の草庵近くに軒を並べて、身の世話をしてくれた。今回松島、象潟の眺めを共にし、旅の助けをしようと旅立つ日、髪を剃り黒染の僧衣を着て名も宗吾と改めた。</p> <ul style="list-style-type: none">・さらに山を登ると岩の頂上から青い滝つぼに飛び落ちる滝があった。滝の裏に行くことができなので裏見の滝ともいうそうだ。 <p>○しばらくは 滝に籠るや 夏(げ)の初め (僧が修行に籠るこの時期、自分も滝の裏に回り滝に籠った気分だ)</p>		
次回予定	平成28年2月11日 10:00～12:00 於:金沢地区センター 余暇室 第一学習 赤井村石井家文書		